

---

# 夜に咲く華

瑞雨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夜に咲く華

### 【ZPDF】

Z7700P

### 【作者名】

瑞雨

### 【あらすじ】

夜にしか咲かない花がある。真っ暗闇にだけ咲く魅惑の花。暗ければ暗いほど美しく扇情的にそして華やかに色香漂う。それは人を喰らう花。時に牡丹のように、時に水仙のように、それは見目形を変え人を魅了する。そんな華に魅せられて今宵もまたひとりの哀れな雄が光を求めやって来る。

遊女の話です。苦手な方はご注意ください。

(前書き)

遊女のお話です。  
ゆるいですが、闇の描写があります。  
苦手な方はご注意ください。

夜にしか咲かない花がある。真っ暗闇にだけ咲く魅惑の花。暗ければ暗いほど美しく扇情的にそして華やかに色香漂う。それは人を喰らう花。時に牡丹のよう、時に水仙のよう、それは見目形を変え人を魅了する。そんな華に魅せられて今宵もまたひとりの哀れな雄が光を求めやつて来る。

「曰那、」

「おお、うひうひ。早くよひ、近づいておくれ」

遊女は口を細めて妖艶な笑みを浮かべた。ちらりちらりと見える着物の前を押さえる手はいつも病的なほどに口く、美しい。華やかな衣装とは対照的に襟から伸びる首は白く無垢である。そして真っ赤な唇は艶やかに光る。早く早くと急かす男を遊んでいるかのように、一步踏み出しても休み、また一步踏み出しても休をとる。ゆるりとした動作の度になる衣擦れの音さえ男をひどく興奮させた。

ふわりと薰りが男の鼻に直接刺激をあたえることには男と遊女の間には簪一本ほどの距離しかない。

「だんな、」

耳元で息を吐くよつに囁く声は男の体の髄まで痺れさせ男の中の獣

を呼び起しす。田を細め、はあ、と真っ赤な唇を濡らしながら濃密な息を吐くと男の喉がゴクリと上下に動いた。

「だんな……」

するりと白い手を差し出すと男は、ゴシゴシとした浅黒い手で力強く掴み、酒の臭いが漂う息を吐いた。遊女は嫌悪感を体の奥底に隠しつつ、とりとした表情を貼り付ける。黄ばんだ歯と分厚くかさついた唇。脂でギトつく醜い頬。何をとってもおぞましいその見田形。思わず鳥肌が立ちそうになる体を小ちく震わせば男はなにを勘違いしたのか、

「せうか、そうか、かわゆいのぉ」

と、遊女のか細い体を力強く抱きしめる。胸がつまりそうなほど抱き締められれば息が出来なくなる。そつと男の胸元を押せば男は満足そうにその下世話な笑みを浮かべ、遊女を組み敷いた。遊女は冷めた瞳を天井に向け、小さく囁いた。

『さあ、地獄の始まり始まり』

「ん? なにか言つたか?」

遊女の体に夢中になる男に遊女の囁きは届かなかつた。

「いいえ、なあんにもありんせん。さあ、旦那、早よつあひきを……」

…、「

頭を横にすらし小首を傾げて甘い声を漏らせば、それが合図かのように男は遊女の細い鎖骨に噛みつくように顔を埋めた。荒々しく己の躰を貪る男はもはや何も頭にはない。理性などといふ言葉など初めてから無かつたかのようにただ本能のまま荒く濁つた息を吐く。そんな男とは裏腹に遊女は自分の体と頭がひどく冷めていることに安堵した。熱く燃えたぎる眼は獸そのもの。ただこの浅ましく愚かな男の欲望を満たすためだけの自分の存在。なにも考えなくてよい。ただ悦びに頬を染め、瞳を潤ませ、躰を反らせるだけでいい。いや、そう見せるだけ。魅せる演技を。まだ私は穢れてはいない。まだ物の怪にとり憑かれていはない。冷静な頭さえあれば大丈夫。あの愚かな同志のように抱かれることを悦んではいない。

ああ、わっちはまだ大丈夫……。

顔を歪ませたくなるほどひの荒い息と雄のニオイ。

ああ、おぞましい。この男が己の躰を、その情けない体で撫で回すなんて。ああ、吐き気がする。

「…だ、んな……、」

いつもしてたまに声を出す。はつきりと発音するのではない。漏らすのだ。息だけで掠れる声を出せば男は悦ぶ。声を抑えて、抑えて、我慢できずに漏れた小さな囁きが男をさらに助長する。

なんて愚かな醜い生物。自我をなくし己の躰を食い尽くす雄たちを何度絞め殺そうかと思つたことか。太く短いその首を、この手で締め尽くせば、この男はなんと鳴いてくれるだろうか。醜い醜い蛙の

潰れたようなそんな声にもならぬ悲鳴をあげてくれるだらうか。

遊女はパタリと投げ出していた手を自分を覆つ男の首にゅつくつと近づけた。男は気づかない。

(ああ、なんて醜い顔、)

(ああ、なんて醜い躰、)

(ああ、なんて醜い生き物、)

そおつと伸ばした指先が男の首に触れるか触れないかの距離になつた瞬間、遊女は突然意識を取り戻したかのようになつた。そして、男の体液の飛ぶ額を見て遊女はその冷たい手を伸ばすのをやめた。自ら雄に触れようだなんて……、考えただけでもゾッとする。

(ああ、怖ろしや。危うく穢れるところで、ありんした……、)

いつまでたつても冷たいままの躰を必死に喰らつ男に冷笑を浮かべれば、男は嬉しそうにまた荒々しい息と共に汚れのない胸元に喰らいつく。

ああ、なんと愚かな雄どもよ。ここにいるは人喰い花。美しい見目で餌をおびき寄せる。美しく着飾つたその姿、濃密な薫りを醉わせれば、男はふらりと吸いつく。細めた眼には誘いを、薄く開いた赤い唇には誘惑を、白い首は惑わしを、細い肩には艶麗を。体の全てが媚薬。一度吸えは逃れることはできない、怖ろしい麻薬。脳髄まで満たす雌の薫り。

ああ、もつと。もつとその醜い姿を晒しておくれ。お前たちが醜くなればなるほどわっちは生きていられる。こんな意味のない世界で己だけが正常だと思える。なにより異常なのは自分なのに。

さあ、早く満たすがよい。お前たちのその愚かしい欲望を。  
さあ、早く喰らえばよい。美しく咲いた花に潜む毒汁を。

『ふふ、旦那、もつと、やせこく・・・・・』

お前たちはもう、逃れられない。

(後書き)

念のため『残酷描写』をキーワードに入れてます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7700p/>

---

夜に咲く華

2011年1月4日01時18分発行